

大正・昭和前期の拓殖大学における 心理学教育に関する史的研究

小澤 貴史

Historical Research on Psychology Education at Takushoku University in Taisho and early Showa period

Takafumi OZAWA

要 旨

1900（明治33）年、台湾協会学校として誕生した拓殖大学は、数度にわたる校名変更を重ね現在に至っている。なかでも、本学史的資料において心理学教育に関する科目名称が確認できるのは、1922（大正11）年に遡る。この時期本学は、大学令による東洋協会大学の設置が認可された年であり、建学後22年目にあたる。以来、心理学部を有さない大学ではあるが、脈々とその教授活動が進められてきたことが窺い知れるが、ここに焦点を当てた研究及び資料は存在しない。

本稿の目的は、本学における心理学教育について、上述の1922（大正11）年から1949（昭和24）年の新制紅陵大学移行までを対象期間として、心理学における世界的潮流と本邦における心理学の発展過程を明らかにすると共に、本学の建学の精神及び独自の歴史の流れの中においてその教育を担った教員を明らかにし、業績や研究内容を探究し、結果として一つの学統として本学自校史に確立することを意図した史的研究である。

キーワード：心理学教育，東洋民族心理研究，論理及心理，建学の精神

I. はじめに

1. 目 的

拓殖大学（以下、「本学」とする）は、1900（明治33）年に台湾協会学校として創設された。その歴史を振り返るに、心理学教育についての記録は限られている。本学が建学以来、心理学を専門とする学部・学科がない大学として現在に至っていることが一因と理解するが、本学年史上に残された断片的な記録を、科目設置の経緯や当時の心理学界との関係に基づき縦断的に捉える。さらには、その際に抽出した担当教員の研究業績

等から本学における心理学教育の内容を類推乃至解明し、一学統として本学自校史上に位置付けることを本稿の目的とする。

2. 心理学の成立

心理学の成立についてエビングハウス（Hermann Ebbinghaus; 1850-1909）は、『心理学（Abriss der Psychologie）』（1908）の冒頭に「心理学の過去は長いが歴史は短い」と記しているが、現在においてはヴント（Wilhelm Max Wundt; 1832-1920）が、ドイツのライプチヒ大学に実験室を開設した1879（明治12）年とする学説が世界的に支持されており、これによれば「心理学」の歴史は140年にすぎないことになる。

わが国においては、元良勇次郎（1858-1912）を最初の心理学者とする学説が主流である。元良は1884（明治17）年に渡米。ジョンズ・ホプキンス大学でホール（G. S. Hall; 1844-1924）に師事し、博士号（Ph.D）を授与され、1888（明治21）年7月に帰国。同年9月より帝国大学（現在の東京大学）にて「精神物理学」担当講師、1890（明治23）年10月帝国大学教授就任。大泉（1998, p.10）は、「彼の帝国大学文科大学教授就任は今日から見れば、わが国における実験心理学の移植の始まりであると同時に、職業としての心理学者の誕生だったと言える」とした。1893（明治26）年「心理学・倫理学・論理学第一講座」を担当し、1903（明治36）年に精神物理学実験室を開設。心理学の学範成立にも努めたが、1912（大正元）年に51歳にして死去。サトウ（2011, p.149）は、「日本の心理学はその初期において、元良という良き人物を得たと総括できるであろう」と述べているが、わが国の心理学界に多大な影響を及ぼした研究者として、また本学の心理学教育を究明するにあたっても、重要な人物であると考えられる。

3. 本学の歴史

本学は、創立以来、教育令及び諸事情等により、数度の校名変更（表1）を経て現在に至る。

表1 校名について

1900（明治33）年	台湾協会学校
1904（明治37）年	台湾協会専門学校
1907（明治40）年	東洋協会専門学校
1915（大正4）年	東洋協会植民専門学校
1918（大正7）年	拓殖大学
1922（大正11）年	東洋協会大学
1926（大正15）年	拓殖大学
1945（昭和20）年	紅陵大学
1949（昭和24）年	紅陵大学（新制）
1952（昭和27）年（現在）	拓殖大学

本学年史より筆者が抜粋

本学『百年史 明治編』p. 60, によれば、本学の創設にあたり「明治期私学のかかる状況の中で台湾協会学校は、官民有志で組織された協会の運営であったという点で、また海外領土の経営に資する人材の育成を教育の目的とした点においても、特異な存在であった」とし、「学校設置の目的を台湾に赴任する官吏の養成におくことにした」と記されている。後に、本学の建学の精神を「積極進取の気概とあらゆる民族から敬慕されるに値する教養と品格を具えた有為な人材の育成」とした。

Ⅱ. 本学における心理学教育

1. 「心理」の発出と対象期間

『百年史 資料編一』『第2章学則』pp. 132-135, によれば、1922（大正11）年8月14日付「東洋協会大学認定願」^①「四学則 第八条 学部ノ学科科目ハ左ノ如シ」とあり、本科選択科目「東洋民族心理研究」（二学年毎週時間数二時間）、大学予科学科過程「論理及心理」（二学年毎週時間数二時間）が確認できた。

このことから、本学における心理学教育の発出を1922（大正11）年とし、1949（昭和24）年の新制紅陵大学移行までを、本稿の対象期間（表1）とする。

2. 科目名称と背景

「東洋民族心理研究」については、本科選択科目として設けられた科目であり、本学の建学の精神に基づく、本学独自の科目である。

「論理及心理」については、文部省「高等学校大学予科学科規定改正」（1900（明治33）年8月4日）にある。また、同省「高等学校規程」（1919（大正8）年3月29日）には、高等科文科の学科目として「心理及論理」があり、教授する内容が同規程第十一条^②に示されている。

この背景には、心理か論理の何れかを専門とする教員を配置すれば、この科目を設置できるといったことがある。規程当時は、東京帝国大学にも心理学科はなく、卒業時には文学士として哲学科、倫理学科、文学科等の学位が授与されていた。後に、哲学科に心理学専修、さらには心理学科が設置されようになっていく。この過程において、同科目名称も、心理と論理が切り離され、現在のような明確な学問体系が形成されていくことになる。

3. 担当教員の解明

本学『年史』に基づき上述2科目を中心として、心理学教育を担当した教員を抽出すると以下の通りとなる。

『百年史 資料編一』「第2章学則」pp. 140-141, 「六 教員ノ氏名資格分担学科学業経歴専任兼任の区分（抜粋）論理及心理 兼任 東京帝国大学卒業 文学士 大室貞一郎（抜粋）東洋民族心理研究 専任 東京帝国大学卒業 文学士 後藤朝太郎」と示されている（『八十年史』pp. 249-257, では「東洋協会大学発足時の担当教員及び科目配当」との記述がある）。

次に記録として確認できるのは、『百年史 大正編』pp. 122-127, 「後藤学長は、教学面でも充実を図った。植民地政策担当の新渡戸稲造が国際連盟事務次長に就任すると、大正9（1920）年に大川周明を招いて植民政策と東洋事情の講義を任せた。大正11年には高柳賢三が英米法を担当、大正13年からは井上孚磨が憲法、安岡正篤が東洋民族心理研究、満川亀太郎が東洋事情を担当した」。加えて安岡正篤について同書pp. 169-171, 「本学教授に就任したのは、大正15（1926）年4月。（中略）前任の後藤朝太郎から受け継いで東洋民族心理研究を担当。昭和9（1934）年まで奉職」とある。

更に、『八十年史』pp. 283-285, 「第二章永田学長と第二次拓殖大学の飛躍」として、「学部予科教員（抜粋）論理及心理 文学士 伊藤智源,（抜粋）東洋民族心理研究 法学士 安岡正篤,（抜粋）専門部教員 論理, 心理, 哲学 文学士 河野正通」の記録がある。1929（昭和4）年5月永田秀次郎理事学長に就任当時と解することができる。同書p. 776, 1934（昭和9）年, 「専門部の拓殖科, 法律科, 商科の各科を廃止, 拓殖大学専門部とし昼間授業に改む」ことが記されているが、『百年史 部局史編』pp. 27-29, この当時の専門部学科課程における科目名・担当教員が「論理心理 中村克己」と確認できる。

先に「東洋民族心理研究」（安岡在職の昭和9年まで継続されていたと推測できるが、詳細不明）、そして「論理及心理」乃至「論理心理」科目名称については、その後1943（昭和18）年まで確認できない。再度、科目名を確認できるのは、同書pp. 42-43, 「拓殖大学一覧（昭和18年度版）教科目とその担当者（抜粋）予科 心理・論理及心理 伊藤智源」の記録からである。

1945（昭和20）年、戦争終結・授業再開、校名を「紅陵大学」と改名するが、続けて『六十年史』p. 323, 「昭和二十一年末現在の教授陣には、左の如き人々がいた。（抜粋）講師 波多野完治」を確認できるが、科目名称の記載はない。

『百年史 昭和後編・平成編』p. 43, によれば「旧制紅陵大学時代の教員陣容を、昭和23年7月31日付新制大学設置認可申請書の添付資料「教員調査」から掲載する。（抜粋）齋藤茂三郎 講師 英語 論理心理」が記録されており、さらに同書pp. 69-78, 「新制紅陵大学発足時の教員及びその担当科目は、昭和23年7月5日設置認可申請書の添付資料「職員組織」によれば、次のとおりであった。（抜粋）一般教養 小笠原慈映 講師 兼任 心理学 東京帝国大学文学部心理学卒業, 同大学院満期退学 文学士」

を確認することができ、これにより 1949（昭和 24）年，新制紅陵大学への移行当時の担当教員が判明した（図 1）。

○東洋民族心理研究：後藤（T11）→ 安岡（T13 → S4 → S9/不詳）
 ○論理及心理：大室（T11）→伊藤*（S4）→中村（S9）→〈不詳〉
 ※専門部）論理，心理，哲学 →河野（S4）→〈不詳〉
 → ○心理・論理及心理：伊藤*（S18）→（科目不詳）波多野（S21）
 → ○論理心理：齋藤（不詳）
 → ○心理学：小笠原（S24）
 東洋協会大学（T11 → T15）／拓殖大学（T15 → S20）／紅陵大学（S20 → S24 新制 → S27）

※：同一人物。本学年史をもとに筆者が作成

図 1 本学心理学関係科目の担当教員及び開講年度

4. 東京帝国大学卒業生との関係

本学心理学教育を担った教員の全てが，東京帝国大学卒業生（表 2）であり，我が国の心理学教育の源流と共にするものである。

前述の通り 1890（明治 23）年に元良は，東京帝国大学教授となり，1893（明治 26）年に松本亦太郎は同哲学科を卒業。1912（大正元）年元良死去後，これを引き継ぎ指導にあたった。また，1905（明治 38）年には哲学科（心理学専修）初の卒業生の一人に桑田芳蔵がいる。両者はヴントと元良に師事し，松本は「実験心理学」，桑田は「民族心理学」に基づき日本の心理学界を先導していくことになる。後に松本は東京高等師範大学教授となるが，本学教員との関係を見出すとすれば，東京教育大学発足時（1949）の実験心理学講座第 1 講座に小笠原，第 2 講座には中村が配置されたとの記録⁽³⁾がある。

他方，桑田の研究⁽⁴⁾は，後藤，安岡，大室，伊藤，河野に少なからず影響を与えていると考える。そして，桑田に 2 年遅れて卒業したのが齋藤であり，「優生学」を専門

表 2 本学心理学教育担当教員の東京帝国大学卒業年度一覧

明治 40 年 7 月	後藤朝太郎（広島）	文学士	文学科（言語学専修）	318 頁
	齋藤茂三郎（神奈川）	文学士	哲学科（心理学専修）	270 頁
大正 11 年 3 月	安岡 正篤（東京）	法学士	政治学科	109 頁
	大室貞一郎（千葉）	文学士	哲学科	264 頁
大正 14 年 3 月	伊藤 智源（愛知）	文学士	倫理学科	274 頁
	中村 克己（新潟）	文学士	哲学科	264 頁
大正 15 年 3 月	河野 正通（徳島）	文学士	哲学科	265 頁
昭和 3 年 3 月	波多野完治（東京）	文学士	心理学科	272 頁
昭和 8 年 3 月	小笠原慈映（岐阜）	文学士	心理学科	272 頁

『東京帝国大学卒業生氏名録』より関係教員を抽出。筆者が作成

とした。また、齋藤から時を隔てて、波多野、小笠原は、心理学科の卒業生であり、波多野に関しては、「児童心理学」に始まり「教育心理学」に関する著書、論文を多数執筆し、教育活動など多方面で活躍した。また、元良が開設した東京帝国大学の心理学実験室を見るに、歴代教官としての着任順でとらえると初代教授元良の在任期間は1890-1912、松本1913-1926、桑田1917-1943、そして小笠原は1967-1970（教養学部教授併任）に在任していた記録⁽⁵⁾がある。

このようなことから、本学における心理学教育、それを担った教員の質の高さの一端が推測できると考える。

5. 担当科目に対する視点及び解説

期間中に心理学教育を担った教員の研究内容を概観するために、著書等に基づく主張や論点等を「視点」として引用し、これをもとに科目との関係性や教授内容を類推した事項を「解説」（暫定的な筆者のノート）として示す。

【東洋民族心理研究】

後藤朝太郎（1881-1945）『漢字音の系統』（1902）、『支那風俗の話』（1927）等、著書
多数 本学初代図書館長（1922-1924）

視点：『支那の社會相』（1926、雄山閣）「八十一 日支國際間の重要心理」より

一 支那人心理の理解 日本の社會に見る輿論は日本の物尺に終始し、それ以上の輿論は起らぬ。日本人の普通考へて居ることは日本の島國を本として多く割り出してゐる。（略）平素いかに支那人を侮蔑して見たところで、到底島國の日本人のあたまの物尺では豫測出來ぬことを平氣で突發させたり、又實に怪しからぬと思ふことを主張して來たり、日本をいぢめ始める。日本は國が小さく國內的によく統一をしてゐるが爲めに、支那をヤンヤンと日本式に物尺で責めて見る。排日のときでもさうである。ところが支那政府は心得たものである。どうもそれは愚民どものやることであるから精々注意しませうけれども、と云つたぐらゐの所で、先づ覺がつく。（略）

二 反省すべき我國民性の短所 國民に自尊心のあるのはよい。又大和魂も結構である。勿論愛國心もよろしい。よい方から之を見れば實に萬國に比べ者のないやうにも云える。（略）然し物はその内部よりのみ見てゐる丈ではいけない。外部より見る方が却つて真相を得ることがある。我が人文の發展を期し、大なる文化的生活に入るに少なからざる妨をなせる我國民性の事を考ふる時の如きは、大いにその國民性を外部より考察するの必要があるのである。（略）

解説：言語学「支那語」を専門とし、異文化理解に対する多角的視点を示した。

現代における文化相対主義に基づく文化人類学に通底する、本学の建学の精神に関わる国際人材の育成に資する民族心理学的教授内容であったと考える。

安岡 正篤（1898-1983）『復興亜細亜の思想的根拠』（1922）、『王陽明研究』（1922）
等、著書多数

視点：『所謂東洋の人物とは何ぞや』（1924、『拓殖文化』五号）

人物といひ、思想といひ、東洋的といふと今以て何だか斯う世人に独断的な非論理的頭脳と疎放な荒縄の情緒とを思はしめる。然しながら本当に東洋の理想精神に参する者にとって、この事は非常に不快な感を起すものである。今や凡ての人類が人として同時に我の自覚を發揮しようといふ真の道德的潮流に棹す時、東洋人自らやはり前述の様な不快な本質的誤解や又世俗的事実を一掃しなければなるまい。人物にしても、真に東洋的とは決して人品の洗練 refinement を欠く野人的意味ではなく、飽迄も靈明なる自己の良心に率りて行為する人、自己の良心を欺瞞して苟合妥協の卑怯なる行動を為すに堪へぬ人を意味する。これは実に東洋精神の真骨頂であつて、一切の東洋哲学は渾てかかる人格の実現完成を欲せざるもの無く、且つ世界は斯の学と斯の人とを熱烈に渴求して居るにも拘らず、不幸にして我国現今の社会は斯の学斯の人と共に底を払つて空しき有様である。（略）

物質文明が殆ど其の頂点に達した現代社会がやはりそれと反比例的に人格生活を無視してゐる爲め、一般民衆が精神的に宛も曠野の黄昏の様な不安と倦怠とに籠められて、堪らなく安住の家路を求めて彷徨してゐることは何人も切感してゐることであらう。（略）人間生活の一番深い一番本質的な努力は飽迄も箇の人生の意味を解釈するに在る。人生の意味を解釈することはつまり我が分内に宇宙を創造し体现することである。もつと割切に言へば宇宙を創造し体现する直下に自己がある。人生の意味を解釈するとは決して単なる観念を考へることでない。箇の全人格全生命を籠めての活動でなければならぬ。（略）

解説：東洋思想を精力的に実践哲学的に説き、東洋思想学習を組織化（2003、佐野）。

陽明学者としても知られるが、明治期以前の学問としての「心学」が心理学との類似度が高い（1997、佐藤）ことから、本学の建学の精神に関わる国際人材の育成に資する民族心理学的教授内容であったと考える。

【論理及心理，その他】

大室貞一郎（1898-1977）『大學及大學生 その三代思想史』（1947），『知性』（1949）等

視点：『青春の足跡 — 学制九十年史 —』（1955，河出新書）「五 明治の青春」より

（略）戦勝は二億數千萬圓の償金と臺灣とを我國に持つて來た。國際的地位の著しく高まると共に，商品の販路は廣まり，企業の規模は大となつた。中心産業は農業より商工業へと變移した。會社工場は簇生し，農民は鋤を棄てて都會に集まり，賃銀労働者の數は急激に増加したが，同時に勞賃，失業等の問題も起り，勞働爭議が頻發して，新しい社會不安が生れて來た。それと共に，個人主義的な，物質主義的な，又享樂的な風潮が現われ，從來そのまの道德や習慣は輕んぜられて來た。それに，新しい科學思想も舊い道德宗教に味方しなかつた。然し問題に對して目を閉づることは出来ない。この新しき事態に對して，如何に考へ，如何に生くべきか，この社會，人間，自我とは如何なるものであるか。時代はかかる問題が單に知性を満足せしむる哲學理論でなしに，同時に感情的要求に應ずる實踐的な答を持つことを望んだ。（略）

解説：担当科目名「論理及心理」「論理及哲学」

専門はドイツ哲学であり，カントや新カント派の思想に関する研究や翻訳が多い（1993，山下）。哲学者としての論理学，社会哲学的内容を教授に活かしていたと考える。

伊藤 智源（不詳）『教育と宗教』（1931），『日本仏教 — 法然上人と日本精神』（1937）等

視点：『日本精神研究方法論』（1935，日本文化研究会編「日本精神研究第十輯」東洋書院）「日本精神研究の方法論」より

（一）歴史的研究と論理的研究 （二）實證的研究と文献的研究 （三）形式的研究と内容的研究 （四）固有思想的研究と外來思想的研究 （五）知的研究と信仰的研究

上來日本精神研究に就いて種々の立場から色々と考へて見たのである。勿論お互いに交錯するところもあるが一應研究の方向を擧げたのである。元來日本精神として一つのものであるのを斯様に種々の立場から考察したが，これは結局一つのものを各方面から考へたものであつた。然して現在我々が此の様に種々の方面から見て行く時にのみ日本精神の姿が明となると思ふ。然し

一個人では此の中の一つを研究するのみにても一生涯を要する程のものであるから、各々分業によつて研究すべきものであらう。

(略) 元來知と信との關係については信には知を以て解し得ない部分が存するのである。「不合理なるが故に我信ず」と放言した西洋中世の神學者すらある。凡て知的研究の基礎に又其の歸着點に信を置かねばならぬ、知も信によつてその力を得來たるもので此の意味に於て知的研究は價值の乏しいものとなる。人間の生活が如何にも不可解の要素を含むことは之を否定することが出来ない様に、又如何にしても人間生活から信仰の大問題を除くことが出来ないのである。

解説：担当科目「論理及心理」, 「心理・論理及心理」, その他「宗教科」関係科目

浄土宗、法然を通した倫理学を専門とし、日本精神の歴史的・論理的研究に基づく倫理学を教授に活かしていたと考える。なお、1929(昭和4)年当時、一時専門部に「宗教科」が開設されたとする記録があり(2000, 浅沼), 浄土宗に基づく宗教学も含めて担当していた可能性がある。

河野 正通(1903-不詳)『歴史哲學概論』(ヘーゲル著, 訳, 1929), 『大論理學』(同, 訳, 1931)等

視点:『歴史哲學概論』(ヘーゲル著, ラッソン編纂, 河野訳, 1929, 白揚社)「譯者序」より

ヘーゲルは(略)ベルリン大學で歴史哲學を講じてゐるが、遂に生前に上梓する機會を獲ないで長逝した。従つて、ラッソンが本書の編纂に用ひた材料は、ヘーゲルの講義の草稿の遺稿と、聽講者の筆記とである。(略)今日は凡てのものを歴史的に觀る時代、歴史的に觀ざるを得ない時代である。人生の問題、社會の問題、等々の凡ての問題は、詮じ詰めれば、歴史の問題である。社會の諸形像、人生の諸領域、宗教、藝術、科學、道德、政治、法律、經濟、等々々は、その具體的な眞相に於ては、悉く歴史的形像であつて、歴史的にのみ眞實に認識せられる。此等の諸形像の現在はそれ自身では不完全な存在であつて、その現在の學的認識はその過去の認識に依る補足を絶対に必要となる。(略)斯かる歴史的必然性を有する「理想」のみが、現實的、必然的に、全社會を揺り動かし、全社會を推し進めて行く、眞實の理想である。

解説：担当科目「論理, 心理, 哲学」

ヘーゲルに関する翻訳書多数。哲學者として論理学, 歴史哲学の内容を教授

に活かしていたと考える。

中村 克己 (1901-1952)『思考過程：心理學的知見』(1948),『心理學の論理』(1948)
等

視点：『價值と思考——心理學的研究——』(1939, 巖松堂)

價值の理論 I. 緒論 II. 先行の心理學的價值理論 III. ヴィーン學團
の價值理論 IV. 心理學的價值理論

思考の諸問題 I. 意義の可塑性 II. 知覺と思考との關係 III. 思考され
るものの恆常 IV. 自然法則ことに因果法則 V. ヴィーン
學團の論理學的函數概念について

解説：担当科目「論理心理」

哲学者, 心理学者。論理学の諸問題から次第に心理学へ関心を深め, 思考活動への考察を中心に実験的研究を試みるなど, ついに心理学界に特異な一地步を占めることになった(1952, 佐久間)。1945(昭和20)年から東京文理科大学の講師として科学方法論を論じていたが, 1949(昭和24)年からは教授となり, 新制大学に移行する際には比較心理学の講座を担当する予定であった(1952, 小保方)。論理学とゲシュタルト心理学の両側面からの知見を教授に活かしていたと考える

波多野完治 (1905-1990)『教育心理學』(ビネー著, 訳, 1930),『國語文章論』(1933)
等, 著書・訳書多数

視点：『兒童心理学』(1931, 同文館)

第一篇兒童の論理・兒童の自己中心的傾向 第一章自己中心性 第二章意識
化の法則 第三章關係判断 第四章濫置 總合能力の歛如 第五章混淆主義
第六章矛盾律 第七章形式的推理

第二篇兒童の世界觀 第一章兒童の實念論 第二章兒童の汎心論(アニミツ
ム) 第三章人工論

第三篇兒童の物理學 第一章運動 第二章法則と理論 結語

解説：担当科目不詳

東京帝国大学心理学科での卒論は「覚醒時における言語暗示の研究」。児童心理学, 文章心理学, 視聴覚教育を専門とした(2003, 大泉)。上述視点の内容は, ピアジェの認知発達理論に基づくものであり, 現代の教育心理学に通底する教授内容であったと考える。

齋藤茂三郎（1881-不詳）『優生學；人類の遺傳と社會の進化』（1916），『遺傳と人性』（1926）等

視点：『現代心理學Ⅴ 民族の心理學 民族優生』（1943, 河出書房）

一 諸言 二 人類の性質 (1)獲得的性質と遺傳的性質 (2)獲得的性質の遺傳 (3)民族優生と文化 (4)社會改善の效果 (5)民族優生と自然淘汰 (6)意識的淘汰 (7)遺傳的性質 三 優秀性質維持の問題 (1)優秀者聚落 (2)集團淘汰 (3)大衆の民族的素質 (4)民族診断 (5)民族優生と人口問題 四 民族素質の類化 (1)人類素質の類化 (2)差別出生率 (3)社會適應性及び小家族の社會的利益 (4)社會適應性と寡産性との結合 (5)差別増加率 五 民族優生の方法 (1)劣等型増殖阻止の方法 (2)野心と先見 (3)心理的環境の変化（結論）

解説：担当科目「英語」「論理心理」

1943（昭和 18）年東京高等工芸学校講師以後の経歴不詳（2003, 大泉）。本学には，1948（昭和 23）年当時在職。東京帝国大学文科大学哲学科心理学専修・卒論は「注意の研究」である。専門は優生学であったが，他の国々が，劣廃的政策を次々と実行していったのに比べれば，日本の心理学者はこうしたことに手を貸すことは少なかった（2002, サトウ）。戦後動乱のなかでの教授は難儀であったのではないかと推測する。

小笠原慈映（1909-1995）『入門心理実験法』（1954），『現代青年心理学講座 1.』（1973）等

視点：『現代心理學の動向 知覺の基礎』（共著，1950, 學生書房新社）

第一章 出發點となる考え方 一 二つの立場 二 心理學の特殊性
第二章 古典的知覺學 一 知覺問題のおこり 二 感官生理學 三 精神物理學 四 構成心理學 第三章 行動主義の理論 第四章 實驗現象學 第五章 科學としての立場 第六章 ゲシュタルト理論 一 その立場 二 この理論の性格 三 取扱われた問題 四 この理論の長短 第七章 今日の知覺學 一 立場の問題 二 力學の建設 三 知覺學の進路

解説：担当科目「心理学」

知覚心理学，視覚研究を専門とした。心理学科卒論は「大きさの恒常」である。1954（昭和 29）年，文学博士（「知覚における場理論の實驗的研究」東京大学）（2003, 大泉）。

新制大学移行に伴い，教職過程の開設，教育心理学へ転じていく過渡期的時

期において、基礎心理学に通底する教授内容であったと考える。

6. 評 価

「東洋民族心理研究」は、言語学、政治学、哲学そして国際主義、現地主義という多角的視点から民族をとらえ、明治期に見られた心学とも言える人間心理を探究・教授していたと考えられ、その内容は総じて民族心理学に通底すると推測する。また、本学の建学の精神の具現化に向け、世界を意識しつつも東洋民族に対する心理的理解という観点、さらには異文化理解、異文化コミュニケーションの観点からも、この講座科目の開設は意義あるものであったと考える。

「論理及心理」については、大室、伊藤、河野については哲学、倫理学を基本として、科目の主旨とする精神作用、思考の原則・方法・概要に主眼を置いた教授であったと推測する。また、中村、波多野、齋藤、小笠原については自身の近代心理学研究の中から基礎心理学に基づく「思考」「児童」「教育」「優生」「知覚」といった、それぞれの専門とする研究課題に関する知見を教授に活かしていたと考えるが、戦前・戦後の時代背景、情勢から授業開講自体思うようにいかなかったことも推測される。

同科目が、専門部乃至予科の二学年又は三学年に週時間数二時間の受講を必修としていたことや担当教員の適格さから、文部省の定める規程（「心理及論理」の教授する内容⁽²⁾）の条件は十分に満たしていたと思慮する。

以上の2科目から、当時の本学心理学教育は、非心理学系大学としては当然ながら心理学実験室を有さないことやカリキュラム上の制限から、より高度な専門性や広範な学術探究にまで至らなかったという側面では、脆弱なものであったと評価せざるを得ない。

Ⅲ. お わ り に

歴史学者であるカー（Edward Hallett Carr; 1892-1982）は『歴史とは何か』（1962）で、「歴史とは現在と過去との絶え間ない対話である」と述べているが、本稿において、本学の新制紅陵大学移行までの過去の心理学教育及び担当教員の学問に対する視点の一部分を解明し、現在まで科目名と教員名のみによる断片的な記録であった史実を、心理学教育という一学統として結び付け、自校史の一部として書き残すことができたことは、これからの教育に活かすことができると考える。しかしながら、着任時期は概ね把握できたが在任期間及び離任時期の明確化には至らなかったこと、個別の研究業績や内容を詳細に論述出来なかったこと、具体的な講義内容や使用していた教科書については究明出来なかった。今後の研究で検証されるべき点と考える。

《注》

- (1) 『拓殖大学百年史 資料編一』「四十三 一年志願・徴兵猶予認定の件」(pp. 132-143)
「東洋協會大學認定願
今般東洋協會大學設立致候ニ就テハ徴兵令第十三条二関スル認定ヲ仰度規ノ事項相具シ
此段奉願候也 大正十一年八月十四日 東洋協會学校設立者 男爵後藤新平
文部大臣鎌田榮吉殿」
第六十一条 六 教員ノ氏名資格分担学科科学業経歴専任兼任の区別(いろは順)(引用)
- (2) 第十一条
心理及論理ハ心意ニ関スル知識ヲ得シメ思考ヲ鍛錬セシムルヲ以て要旨トス
心理及論理ハ各種ノ精神作用, 思考ノ原則及其ノ方法ノ概要ヲ授クヘシ
- (3) 筑波大学人間系心理学域の歴史
ホームページ (<http://www.human.tsukuba.ac.jp/psyche/institute/p06.html>) アクセス日 2019. 2. 22
筑波大学心理学系は、東京教育大学、東京文理科大学、東京高等師範学校の心理学教室に遡ることができます。東京高等師範学校当時は、松本亦太郎先生、松本孝次郎先生、大瀬甚太郎先生が教授として活躍されました。東京文理科大学開設当初は、田中寛一教授、檜崎浅太郎教授、武政太郎助教授、依田新助手が学生の指導をおこなっております。東京教育大学発足当時の心理学教室はさらに充実して6講座でした。実験心理学3講座には、第1講座に小保内虎夫教授・小笠原慈映助教授、第2講座に中村克己教授・上武正二助教授、第3講座に依田新教授が配置され、教育心理学3講座には、第4講座に中野佐三教授・小宮山栄一助教授、第5講座に後藤岩男教授・中島貞夫助教授、第6講座には桂広介教授がそれぞれ配置されていました。(引用)
- (4) 桑田芳蔵 1918.『ヴントの民族心理学』文明書院
序論 第一 ヴントの心理學の根本觀念
ヴントの民族心理學を叙述するに當つて、其の準備として豫め述べて置くことは、彼の心理學全般及び個人心理學に就いての見解である。それ故に次には序論の程度に於いて其の大體を略述して置くのである。(略)
心理學の二大部門としての實驗及び民族心理 此の方法論と關係して心理學中の諸部門の品等が定められる。ヴントは動物、兒童、民族心理學は凡て精神の發達を取り扱う部門となし、精神の現象を研究する實驗心理學(略)と相對立せしめ、或は實驗心理學と兒童心理學とを合して廣義の個人心理學と名付け、一般的或は比較心理學として動物、民族心理學の兩部門が此に對する。(略)彼によれば科學的心理學は二個の主要部門に分かれる。即ち一は實驗心理學(狹義の)一は民族心理學である。(略)(引用)
- (5) 東京大学大学院人文社会系研究科 東京大学文学部 心理学研究室「研究室の歴史」
ホームページ (<http://www.l.u-tokyo.ac.jp/psy/rekishi.html>) アクセス日 2019. 2. 22
東京大学・人文社会系心理学研究室史のページは、立命館大学文学部心理学科教授の佐藤達哉さんが、1997年度・文部省内地研究員として当研究室に滞在した際に作成しました。現在公開している内容はその抜粋です。(引用)

参考文献・引用文献

- 浅沼薫奈著 2000.「拓殖大学戦前50年間における学部・学科、学科目、在学生徒数の変遷〔調査報告第1報〕」『拓殖大学百年史研究 5号』拓殖大学創立百年史編輯室
- 淡路・古賀・藤村・松本・上野・伊藤・倉田著 1934.『現代心理學第八卷 産業心理學I』河

- 出書房.
- 伊藤智源著 1935.「日本精神研究の方法論」『日本文化研究会編 日本精神研究第十輯日本精神研究の方法論』東洋書院.
- 植松・大石・戸澤・戸川・石井・菊池・平野著 1933.『現代心理學第六卷 法律・政治の心理學』河出書房.
- 大芦治著 2016.『心理学史』ナカニシヤ出版.
- 大泉溥編纂 2003.『日本心理学者事典』クレス出版.
- 大室貞一郎著 1947.『大學及大學生 その三代思想史』新文藝社.
- 大室貞一郎著 1955.『青春の足跡——学制九十年史——』河出新書.
- 小笠原慈映著 1950.『知覺の基礎』『現代心理学の動向』學生書房新社.
- 小保内・佐久間著 1952.「彙報 前評議員中村克己氏追悼記」『心理学研究』第23巻第1号.
- 小保内・豊原・倉石・横瀬・橘・望月・辻村・兼子・西澤著 1931.『現代心理學第七卷 国防心理學』河出書房.
- 神渡良平著 2010.『安岡正篤の世界——先賢の風を慕う』同文館出版.
- 柿崎祐一 不詳 「最近の我國心理學界」 インターネット閲覧日:2019.2.22
(<http://dlisv03.media.osaka-cu.ac.jp/contents/osakacu/kiyo/DBd0010905.pdf>)
- 後藤朝太郎 1924.『支那の社會相』雄山閣.
- 後藤朝太郎 1931.『時局を縫らす 支那の民情』千倉書房.
- 桑田芳蔵著 1918.『ヴントの民族心理學』文明書院
- 桑田・古賀・小山・久保・上野・暉峻・内海・近藤・橘著 1932.『現代心理學第二卷 社會心理學』河出書房.
- 齋藤茂三郎著 1933.「民族優生」『現代心理學第5巻 民族の心理學』河出書房.
- 佐久間・速水・中村・高橋・岡・相良・辻・須藤著 1932.『現代心理學第三卷 文化心理學』河出書房.
- 佐藤達哉, 溝口元編著 1997.『通史 日本の心理学』北大路書房.
- サトウタツヤ・高砂美樹著 2003.『流れを読む心理学史——世界と日本の心理学』有斐閣.
- サトウタツヤ著 2011.『方法としての心理学史 心理学を語り直す』新曜社.
- サトウタツヤ著 2002.「戦前期・戦時期体制と日本の心理学——優生学・軍事・教育との関わりを中心に——」『立命館人間科学研究 第4号 [通巻20号]』立命館大学人間科学研究所.
- 心理科学研究会歴史研究部会編 1998.『日本心理学史の研究』法政出版.
- 鈴木・太城・松本・増田・櫛田・狩野・眞邊・結城・淡路・辻著 1932.『現代心理學第九卷 産業心理學II』河出書房.
- 拓殖大学六十年史編纂委員会 1950.『拓殖大学六十年史』拓殖大学.
- 拓殖大学創立八十周年記念事業事務局 1975.『拓殖大学八十年史』拓殖大学.
- 拓殖大学百年史編纂委員会 2010.『拓殖大学百年史 明治編』拓殖大学.
- 拓殖大学百年史編纂委員会 2010.『拓殖大学百年史 大正編』拓殖大学.
- 拓殖大学百年史編纂委員会 2011.『拓殖大学百年史 昭和前編』拓殖大学.
- 拓殖大学百年史編纂委員会 2013.『拓殖大学百年史 昭和後編・平成編』拓殖大学.
- 拓殖大学百年史資料編集委員会 2003.『拓殖大学百年史 資料編一』拓殖大学.
- 拓殖大学創立100年記念出版 2003.『安岡正篤——慎独の一燈行』拓殖大学.
- 拓殖大学創立百年史編纂専門委員会 2004.『拓殖大学百年史 部局史編』拓殖大学.
- 武政・檜崎・岡部・内田・阪本・寺門・吉岡・小倉・佐久間・高良著 1933.『現代心理學第十卷 教育心理學I』河出書房.
- 田中・大場・天野・齋藤・長谷川・渡邊著 1933.『現代心理學第五卷 民族の心理學』河出書房.

- 中村克己著 1934.『価値と思考——心理學的研究——』巖松堂書店.
- 長谷部茂著 2014.「明治・大正期における拓殖大学草創期の台湾語教育について」『拓殖大学語学研究 第131号』拓殖大学言語文化研究所.
- 波多野完治著 1931.『兒童心理學』同文館.
- ヘーゲル著, ラッセン編纂, 河野正通訳 1929.『ヘーゲル著作集 歴史哲學概論』白揚社出版.
- 無藤隆・森敏昭監修 2012.『心理学史』学文社.
- 安岡正篤著 1924.「所謂東洋の人物とは何ぞや」『創立100年記念出版 安岡正篤——慎独の一燈行 [拓殖文化五号]』拓殖大学.
- 山下・増田・芹澤・青木・岡本・牛島・丸山・梅津・橘・三木・鈴木・竹田・波多野著 1983.『現代心理學第十一卷 教育心理學Ⅱ』河出書房.
- 山下太郎著 1993.「大室貞一郎先生の経歴と大室先生記念会の経緯」『文化と哲学 第11号』静岡哲学会.
- 正木・園原・藤木・吉益・依田・丸井・松本著 1932.『現代心理學第四卷 性格心理學』河出書房.
- 渡辺利夫著 2013.『アジアを救った近代日本史講義 戦前のグローバリズムと拓殖大学』PHP新書.
- Carr, E. H. 著, 清水幾太郎訳 1962.『歴史とは何か』岩波書店.
- Ebbinghaus, H. 1908. Abriss der Psychologie. Leipzig: Veit & Co. (エビングハウス, H. 高橋穰訳 1912.『心理学』富山房.)

(原稿受付 2019年6月27日)